

# クライストの小説「決闘」に おける信頼について

加 納 邦 光

ハインリヒ・フォン・クライストは彼の作品において、外的な運命の力、あるいは動揺し、混乱する内的な感情や感情の異常なまでの執着性、徹底性などから、またこれらを交錯させてその主題を構成している。彼が人間を支配している運命の力に注目し、それに畏怖の念をもっていたことは彼の若い頃の手紙にも現われているが、彼が作品を生み出す際により注目したのは外的な運命の力よりも心の内奥に揺らめいている感情の炎であったと思われる。

私がここで取り上げる『決闘』においても彼が絶えず問題にした外的な運命の力と人間感情との対立、その対立の解決が取り扱われている。即ち決闘をとおして示された奇妙な神の判決と、フリードリヒ・フォン・トロータの胸にあかあかと燃えている感情—リッテガルデ・フォン・アウエルシュタインへの強い信頼感—との対決、そして後者による前者の克服ないしは両者の一致である。

私はこのフリードリヒのリッテガルデへの信頼がどのような意味をもつものであるのか、この作品を通して、さらに彼の他の作品やクライスト自身の生涯との関連において考察してみようと思う。そしてそこからクライストにおける信頼が、Witz や Verstand によるのではなくて人間の心の奥底にある感情から生み出される他者理解の仕方であること、またこれによってしか真の相互理解はありえないとクライストが考えていたことを指摘したいと思う。

## I

赤ひげヤーコブ伯爵は異母兄弟ヴィルヘルム・フォン・ブライザッハ大

公に子供がないため、その死後は大公の地位が当然自分の手に帰すべきはずであったが、プライザツハ大公がカタリーナ・フォン・ヘルスブルック伯爵夫人と内縁関係を結んだため、大公と仲が悪くなり、やがて大公が私生児フィリップ・フォン・ヒューニンゲン伯爵を皇帝に認知させる事態となり、正式の皇帝の承認がある前に、大公を殺害するに至った。しかしヤーコブ伯爵は大公を即死させることができず、大公はフィリップ伯を王座の後継者に、またフィリップ伯が幼少のため、母親を後見人かつ摂政とするよう、臣下の前で遺言したため、状況が好転するのを待とうとする。そして彼はかえって国民の祝福と熱狂的な尊敬を受けるようになる。一方大公殺害犯人の調査は着々と進み、大公暗殺に使われた矢鏃がシュトラースブルクの矢製作者によって、ヤーコブ伯爵の注文で製作されたことがわかる。官房長はこの事実をヤーコブ伯爵の評判の良さと、彼を敵にまわす危険から、幾週間か自分の手許にとめておくが、外出をまれにしかしないヤーコブ伯爵が殺人事件の晩外出していたことを知って大公夫人に報告する。大公夫人は議会にこの事実を提出する危険を恐れて、この疑いに対して反論するようヤーコブ伯爵に手紙を送る。ここにおいてヤーコブ伯爵は前から思いをよせていた未亡人リッテガルデ・フォン・アウエルシュタインへの恋をこの嫌疑から自分を救うために利用する。即ち大公殺害の夜、リッテガルデの許に通っていたという実際彼にとっては真実であるアリバイを持ち出して皇帝の下の法廷で、事の決着をつけようとするのである。こうして気高い未亡人リッテガルデは赤ひげヤーコブ伯爵の邪しな恋や奸計によってバーゼルの法廷へ喚問される。彼女の味方であるべき兄弟たちも彼女に何の援助もしないばかりか、自分たちの財産の取り分が増えるため、あっさり彼女を追い出してしまう。こんな心細い彼女が唯一の味方として頼るのがかつての恋人フリードリヒ・フォン・トロータであった。リッテガルデがどんな逆境にあっても、なお自分の胸に真実に燃える

感情を支えとする人なら、このトロータも分別や理性でなしに自己の胸に燃える感情に最も重きを置く人であった。彼女が彼に助力を懇願した時、彼は言う。

„Genug, meine teureste Littegarde! . . . . verliert kein Wort zur Verteidigung und Rechtfertigung Eurer Unschuld! In meiner Brust spricht eine Stimme für Euch, weit lebhafter und überzeugender als alle Versicherungen, ja selbst als alle Rechtsgründe und Beweise, die Ihr vielleicht, aus der Verbindung der Umstände und Begebenheiten, vor dem Gericht zu Basel für Euch aufzubringen vermögt.“

Rudolf Ibel が「あらゆる外面的状況が気高いリッテガルデの罪を証明しているとしても、フリードリヒはその状況を調べさえもしないで彼女の無実を信じ、決闘の神明裁判を敢行している。」<sup>1)</sup>と述べているように、フリードリヒは自分の胸に燃えているあつい感情に、即ち何ものにも揺らぐはずのない相手に対する絶対的な信頼にこそ、人間理解の最も強力な礎柱をおいている。こうして彼は赤ひげヤコブに決闘を申し込む。しかし神の判決はトロータの初めの優位にもかかわらず意外にも彼に負けを宣告する。トロータは拍車に足をとられて倒れ、二度までもヤコブの剣を受ける。しかしこの敗北は神の深い配慮に基づく一時的な仮象にしかすぎなかった。誰の目にも死は歴然としていると思われていたのに彼は何ら不具となることなしに、数週間のうちに回復すると医者たちは断言する。しかしトロータの母ヘレーナ夫人は決闘によって神が下し給うた見かけの判決に惑わされ、トロータを戒めてこの恥ずべき卑劣な女を忘れるように言う。それに対してフリードリヒは次のように言う。

„Sei es! . . . . auf einen Augenblick unterlag ich ihm. Aber ward ich durch den Grafen überwunden? Leb ich nicht? Blühe ich nicht, wie unter dem Hauch des Himmels, wunderbar wieder emporkommt, vielleicht in wenig Tagen schon mit der Kraft doppelt und

dreifach ausgerüstet, den Kampf, in dem ich durch einen nichtigen Zufall gestört ward, von neuem wiederaufnehmen?“

このようにリッテガルデに対する彼の信頼は少しも揺らごうとしていない。彼は外部に示された誰の目にも確かな神の判決にすら、それを本当のものとは考えず、自分の胸の中の真実と叫ぶ声にのみ耳を傾けている。そしてむしろ自分の心のどこかに巣くっている罪がリッテガルデを巻き添えにしたと思って苦しんでいる。そして彼女の身を案じて彼女の獄室を訪ねるのであるが、リッテガルデは彼を頑強に拒絶する。

„Wenn dir ein Funken von Mitleid im Busen glimmt, hinweg! . . . wenn ich nicht wahnsinnig werden soll, so berühre mich nicht! Du bist mir ein Greuel; lodernes Feuer ist mir minder schrecklich, als du!“

運命は彼女の無罪を示すはずであった唯一の友、愛するトロータを倒すことによって、彼女を残酷に打ちのめした。痛ましく傷ついたトロータの姿に彼女は自分の胸に確と燃えているはずの純正潔白な感情を無残にも打ち破った運命の恐ろしい形相を見たのである。彼女にはもうトロータのやさしい慰めの言葉も耳に入らない。しどけない姿で髪をふり乱して叫ぶばかりである。この激しい拒絶にあつてトロータの胸にもはじめて忌わしい疑惑が生じる。

„Sprach das Gottesurteil, Unglückliche, die Wahrheit, und bist du des Verbrechens, dessen dich der Graf vor Gericht geziehen hat, bist du dessen schuldig?“

彼女は答える。

„Schuldig, überwiesen, verworfen, in Zeitlichkeit und Ewigkeit verdammt und verurteilt! . . . Gott ist wahrhaftig und untrüglich; geh, meine Sinne reißen, und meine Kraft bricht.“

トロータは自分の胸の中に沸く感情で判断する人である。その自らの胸が固く信を置いた相手から自分の判断が誤りであると言われる。彼は今まで頼りにしていた信頼の柱が倒れたのを感じて気を失う。運命にさえ毅然として少しもたじろがなかった感情はここにおいて一時的に敗北する。決闘で敗れた事よりも、心で深く愛し合っているはずの二人の間の信頼がくずれかかった時、この小説は最も悲劇の様相を表わす。しかしそれに続いて起こるヘレーナ夫人のリッテガルデへの呪いと侮蔑の言葉に、なおもわずかに燃えていたリッテガルデの感情は反撥する。

„Der Elende ! . . . Ich erinnere mich, daß . . . Dies ist die einzige Gemeinschaft, die ich jemals mit diesem Nichtswürdigen und Niederträchtigen gehabt !“

この言葉が二人の間に再び信頼の絆を結びなおすきっかけとなる。

„Wie ? . . . Diese Worte waren Musik meinem Ohr !— Wiederhole sie mir ! . . .“

Hast du mich, um jenes Elenden willen, nicht verraten, und bist du rein von der Schuld, deren er dich vor Gericht ziehen ?“

そして彼女の真実の言葉が出る。

„Wie die Brust eines neugebornen Kindes, wie das Gewissen eines aus der Beichte kommenden Menschen, wie die Leiche einer, in der Sakristei, unter der Einkleidung, verschiedenen Nonne !“

こうして二人の間には前にもまして強い信頼が、どんな運命に対しても、もう少しもたじろぐ事のない信頼が結ばれる。

„. . . habe Dank ! Deine Worte geben mir das Leben wieder ; der Tod schreckt mich nicht mehr, und die Ewigkeit, soeben noch wie ein Meer unabsehbaren Elends vor mir ausgebreitet, geht wieder, wie ein Reich voll tausend glänziger Sonnen, vor mir auf !“

このように二人の胸に燃えている信頼は運命の試練の前に一度消え去ってしまったかのように見えながら、なおもかすかに燃えていたリッテガルデの誇りによって更に強い、もう二度とほぐれる事のない絆に結びなおされることとなる。このように二人の心が強く赤々と信頼に燃えるのを待っていたかのように運命は二人の名誉回復と祝福を与える。

即ちトロータはたちまち体が回復したのに対して、赤ひげヤーコブはトロータに受けたわずかの傷がもとで体が腐りはじめ悲惨な最後を遂げねばならなくなる。

フリードリヒの

„... türme das Gefühl, das in deiner Brust lebt, wie einen Felsen empor :...im Leben laß uns auf den Tod, und im Tode auf die Ewigkeit hinaus sehen, und des festen, unerschütterlichen Glaubens sein: ... “

の言葉を二人は自分たちの胸にしっかりと確信できたため、二人の結婚式もまた本当の輝きを放ちえたのである。

## II

以上『決闘』におけるフリードリヒ・リッテガルデの信頼がいかなる経過を辿って、二度と崩れる事のない信頼のかけ橋構築に成功しているかを見てきたが、クライストの他の諸作品にも同じ信頼の問題が絶えず繰り返して現われている。たとえば『チリの地震』においてはイエローニモとヨゼーフェの恋人同士は当時の社会の習慣や束縛の中で破滅に瀕している時、未曾有の地震によって生命を救われるのであるが、まさしくこの地震が彼らを抑えつけている社会の習慣や束縛を打ち壊し、人々を皆兄弟にしてしまったとってしまう。即ち二人は大地震によって人々の心が善意と同情と信頼の美しい花に大きく開き、一つの家族になったと思う<sup>2)</sup>が、この感情の思い違いの中に二人の悲劇は準備されている。また『聖ドミンゴ島の

『婚約』では動乱の只中の変転きわまりない事件の推移の中で、グスタフとトニーの間の信頼が強固不変のものでありえたかが厳しく試されているし、『O侯爵夫人』ではO侯爵夫人は人間の理解を越えて生じたと思われる異常な事件によって激しく動揺させられているが、それでもなお自分の胸の感情そのものを強く信じ、誤解に対して少しもたじろがなかったためにこの物語の悲劇的なものは克服されている。その他ドラマにおいても『シュロップフェンシュタイン家』ではロツスィッツ家とヴァルヴァント家の不和・誤解・憎悪の渦の中でオットカールとアグネスの間で、『ペンテズイレーア』では戦闘の最中のペンテズイレーアとアヒレスの間に、『アンフィートリュオン』ではアンフィートリュオンに化けたユーピターと本物のアンフィートリュオンの間におけるアルクメーネの心において、また『ホンブルク公子』における公子の選帝侯の死刑宣告の納得の仕方において、絶えず誤解が生じやすい大きな事件や複雑な状況の中で、恋人同士や主人公の心の中の信頼感や感情が本当に真実で純粋不変のものでありえたかが試されているのである。

### III

このように彼の諸作品において絶えず信頼の問題が取り扱われ、また直接信頼とは関係ない場合でも感情の問題はほとんど全作品に現われているのであるが、これはとりもなおさず、クライスト自身が「信頼」ということを、また感情の問題を一生かかって考えていたことを示すものであろう。では次に彼の諸作品に現われた信頼の問題が、彼自身の生涯においてどのように現われているかを見ていきたいと思う。彼が信頼を早くから痛切な欲求として望んでいたことは、ヴェルツブルク旅行に際しての婚約者ヴィルヘルミーネ宛ての手紙<sup>3)</sup>にも何度も強く示されているが、これはまた同時に彼が早くから孤独を感じ、それに苦しめられていた<sup>4)</sup>ことを示すものであった。そしてまたこの孤独を強く意識するということは、彼が人間存

在のはかなさ・もろさを強く感じていたからであった。そのために孤独感を克服し、人生の究極的真理・真の幸福に到達しようとする性急な彼の努力はカント哲学における挫折<sup>5)</sup>を経験することにもなる。そしてこの衝撃はますます彼をして人間存在のはかなさを強く感じさせることとなり、不安のままに異母姉ウルリーケと共にする旅においても人間を支配し、人間を嘲笑し翻弄しているかのように思える Verhängnis や Zufall への恐怖が強く彼の心に刻印される<sup>6)</sup>ことになる。そしてこのような恐ろしい運命を感じれば感じるほど、不安をとり除き、かえって運命に対抗してこれを克服しようとする願望は大きくなる。そしてこの願望を満たすものは彼が心から親しみうる人との唯一無二の信頼に他ならない。彼の心から純正に湧き上り、しかも少しも揺らぐことのない強い感情から生ずる信頼なのである。彼はヴィルヘルミーネに言う。

Ich werde Dir oft schreiben. Aber es mögen Briefe ausbleiben so lange sie wollen. Du wirst immer überzeugt sein, daß ich alle Abend und alle Morgen, wenn nicht öfter, an Dich denke. Dasselbe werde ich von Dir glauben. Also niemals Mißtrauen oder Bangigkeit. Vertrauen auf uns, Einigkeit unter uns !<sup>7)</sup>

このような気持で旅の途上で訪れたパリにおいても彼がそこに見るのは彼が最も恐れ嫌う人々が虚偽に飾られ、冷淡でお互いに孤立し合っている姿であった<sup>8)</sup>。鋭敏に人間のはかない存在と孤立を感じれば感じるほど、彼にとって人間が真実であり、率直に親しみ合うことのできる生活への憧れは強くなっていく。パリを訪れる前にドレスデンでピクニックに行った際にも自然に囲まれた生活に強く心惹かれるのを感じ<sup>9)</sup>、信頼に結ばれた本当の愛の生活をつくるには、美しい自然に囲まれた農村の生活が最もふさわしいと考えるようになっていく。しかしヴィルヘルミーネと共に農夫になろうとする<sup>10)</sup>彼の希望はヴィルヘルミーネの拒絶にあい<sup>11)</sup>、彼は彼女との婚約を解消する。彼は室に閉じ籠り、床に臥し、ひたすら死を願う<sup>12)</sup>。



しかしヴィルヘルミーネとの訣別は彼を決定的に死に追いつめることにはならない。彼にはまだ彼を励まし助けてくれる信頼に結ばれているウルリーケがいるのだから。彼は体が回復すると創作活動に没頭する<sup>13)</sup>ことになる。こうして学問への没頭とその挫折・ヴィルヘルミーネとの固い信頼と愛情を結ぶことの希望とその崩壊、そして Dichter としての最高の花環を求めて『ローベルト・ギスカルト』創作への死にもの狂いの没頭とその失敗、等を彼は次々と経験することになる。

彼はヴィルヘルミーネに

Dann geht der Körper immer weiter und weiter von Dir, indessen die Seele immer zu Dir zurück strebt. Bald an diesen, bald an jenen Ort treibt mich das wilde Geschick, indessen ich kein innigeres Bedürfnis habe, als Ruhe—Können so viele Widersprüche in einem engen Herzen wohnen ?-?<sup>14)</sup>

と述べているが、まさしく彼をヴィルヘルミーネから引き離す原因は人間全体を支配している運命というよりも、それを感じて不安をおぼえ、動揺し、さまよい、駆けずりまわらねばならない彼自身の心の中に、彼自身の感情に存すると言えよう。この後の官吏生活・創作活動の復活・反ナポレオン運動と雑誌編集—しかし彼はそのどれにも報われぬ。財政的にもますます窮迫していく。そして疲れ切った彼が最後に戻っていく所がウルリーケの許であった。しかしウルリーケも遂に彼を拒絶してしまう。

So versichre ich Dich, wollte ich doch lieber zehnmal den Tod erleiden, als noch einmal wieder erleben, was ich das letztmal in Frankfurt an der Mittagstafel zwischen meinen beiden Schwestern, besonders als die alte Wackern dazukam, empfunden habe; laß es Dir nur einmal gelegentlich von Ulriken erzählen.<sup>15)</sup>

唯一の支えを彼は遂に失う。「鼻の上にくらくらす日の光も痛いほど」<sup>16)</sup>に彼は生きていくことに傷つく。彼には来世への橋渡しをする音楽だけが聞えてくる。

そして音楽で知り合ったフォーゲル夫人との間に死の約束ができた時、彼は何ものにも捉われない純真な自己となり、彼女とヴァンゼー湖畔で子供のように遊びたわむれながら<sup>17)</sup>死んでいく。地上での幸福を全部あきらめた時、感情の混乱・激情を浄化して、天に向って晴やかに登っていくのを彼は感じていた<sup>18)</sup>のである。

## 結 語

クライストは啓蒙思想の影響の中に成長してきて、時代の子として当然その影響を受け、真理探究をその理想として掲げたのであった。しかし学問を修め、教養を得ることによって完成という目標に近づこうとする心に、絶えずもうひとつの心、即ち知識では人間は幸福になれない<sup>19)</sup>とささやく心が存在していた。それは確かに「自分という言い表わしがたい人間をどう言うべきかわからない。」<sup>20)</sup>と言わせる混乱し動揺するもの、非調和的で不合理なものの中にそのエキスをもち、彼をして「私の心を体からもぎとり、手紙にぶち込んで送りたい。」<sup>21)</sup>というほどにもどかしさを感じさせ、「私の心の中にある全てのものが糸巻き竿にある麻のくず糸のように纏れ合っている。」<sup>22)</sup>と言わせるほどに理知の力と衝突し、あるいは感情同士の戦いを惹き起こすものであった。しかしそれだけにそこから発するものは物事を冷静に客観的に判断し、処理していくという理性においては見られない盲目的な確信、素朴な信頼、不変な愛情というものでありえたのである。それ故彼はこの動揺する盲目的な感情によって絶えず「地獄に向って行く」<sup>23)</sup>ような破滅感を感じさせられたのであるが、それでもこの感情によってしか自分が幸福になれないことも感じとっていたのであり、そこにこそ人間相互理解の礎柱を求めようとする態度が出てきたのであった。だからこそクライストはこの小説において一時的に崩れかけたフリードリヒ・リッテガルの信頼を、二人の間になおも真実に燃えている感情、その感情の一番奥底で清らかに澄んで流れているせせらぎに耳

を傾ける時、真の強い信頼が結びなおされ、運命をも、人間存在のはかなさをも乗り越えられるという確信と心からの願望をもって描出したのである。

## 註

- 1) Rudolf Ibel : Heinrich von Kleist, Schicksal und Botschaft S.123
- 2) Heinrich von Kleist: Sämtliche Werke und Briefe, Carl Hanser Verlag, Zweiter Band S.152
- 3) ヴィルヘルミーネ宛て 1800年初頭の手紙  
1800年8月20日付け, 1800年9月5日朝8時付け, 9月15日付けなどの手紙
- 4) 註3にあげた手紙にもあらわれているが, そのほか1799年11月12日付け,  
1801年2月5日付けのウルリーケ宛ての手紙に明瞭にあらわれている。
- 5) ヴィルヘルミーネ宛て 1801年3月22日付けの手紙  
ウルリーケ宛て 1801年3月23日付けの手紙
- 6) ヴィルヘルミーネ宛て 1801年4月9日付け  
カロリーネ・フォン・シュリーベン宛て 1801年7月18日付け
- 7) ヴィルヘルミーネ宛て 1801年4月9日付け
- 8) カロリーネ・フォン・シュリーベン宛て 1801年7月18日付け  
ルイーゼ・フォン・ツェンゲ宛て 1801年8月16日付け
- 9) ヴィルヘルミーネ宛て 1801年5月21日付け
- 10) ヴィルヘルミーネ宛て 1801年10月10日付け  
同じく 10月27日付け
- 11) ヴィルヘルミーネ宛て 1802年5月20日付け
- 12) ヴィルヘルミーネ宛て 1802年5月20日付け  
ヴィルヘルム・フォン・パンビッツ宛て 1802年8月付け
- 13) ウルリーケ宛て 1803年10月5日付け
- 14) ヴィルヘルミーネ宛て 1801年6月3日付け
- 15) マリー・フォン・クライスト宛て 1811年11月10日付け
- 16) 同上
- 17) Heinrich von Kleists Lebensspuren, herausgegeben von Helmut Sembdner S.479
- 18) ソフィー・ミュラー宛て 1811年11月20日付け
- 19) ウルリーケ宛て 1799年11月12日付け
- 20) ウルリーケ宛て 1803年3月(13)14日付け
- 21) 同上
- 22) ヴィルヘルミーネ宛て 1801年6月3日付け
- 23) ヴィルヘルミーネ宛て 1801年7月21日付け

## Über das Vertrauen in der Erzählung „Der Zweikampf“ von Heinrich von Kleist

Kunimitsu Kanô

Man kann die Gefühlsprobleme als einige der wichtigsten Motive in den Werken Kleists betrachten. Ich glaube, daß Kleist dem Wort „Gefühl“ die Bedeutung einer Flamme aus dem Innersten des Herzens beigegeben hat. Und wir sehen, daß eines dieser Gefühle sich in seiner Novelle „Der Zweikampf“ als das unbedingte menschliche Vertrauen zeigt.

Friedrich von Trota glaubt an die Unschuld Littegardes nicht durch den Verstand und die Berechnung, sondern kraft der Stärke seines Gefühls.

Das Band des Vertrauens zwischen Friedrich und Littegarde wird zwar einen Augenblick lang durch das harte Geschick verwirrt, aber das Vertrauen zwischen ihnen gewinnt dann einen endgültigen, glänzenden Sieg. Das Motiv des Vertrauens wird nicht nur in dieser Novelle, sondern auch in den anderen Werken Kleists sehr oft behandelt.

Auch in seinen Briefen, besonders in den Briefen an Wilhelmine von Zenge und Ulrike von Kleist, begehrt er sehr oft nach einem unbedingten Vertrauen.

Das zeigt uns, daß Kleist selbst in seinem ganzen Leben sehr danach verlangt hat: noch im Augenblick seines Todes gibt er sich einer Frau als naiv vertrauendes Kind.

Damit hatte Kleist endlich die Verwirrung der Gefühle überwunden und sich befreit. Er wurde ganz zu einer „Marionette“, die Gott tanzen läßt und die vorher immer noch von Gefühlen getrieben und gehetzt worden war.

Das Vertrauen der zwei Verliebten in dieser Novelle symbolisiert nach meiner Meinung die Verwirklichung der Sehnsucht Kleists, die sein volles Lebensideal darstellte.